

平成 28 年 7 月 7 日 (木) 1 日目

【登 園】

梅雨の合間、今年も始まった。7月に入り、少しずつお泊りの話をしてきたが、今年には小さな年少々も加わっての総勢 14 名。直前のイノシシ騒動もあり、子どもたちの気持ちが多岐に転ぶか分からないので、むしろいつもの朝っぼく迎え入れるようスタッフも体制を固めた。

ところが朝一番、YHは、テラスのマットが取り払われていることに気づくと、「いつもと違う！」と入ってこない。確かにいつもと違う(;^ω^)! スタッフが「中は一緒だよ。入っておいで」と誘ったが、もう後の祭り。荷物を置き終えたおばあちゃんがハグしながら「いっぱいわらべうたで遊んでおいでね」と帰った後も、デッキの端にひとりしゃがんだまま。

スタッフが貝殻を持って近づき、「♪どっち、どっち、えびすさん」でしばらくやりとりすると、ようやく笑顔が見え始めたYH。「一緒に入ろうか。貝殻、持っとく??」と聞くと、何とか頷いてくれた。「大事に持っていてね!」というのと、「うん」と言い、貝殻を握りしめてピンクハウスへ。しばらくは誰とも話さず、貝殻を見たりして過ごしていたが、いつの間にかみんなと行動を共にしていた。その後、「YH、貝殻をそろそろ、しまおうか?」というのと、袋の中に入れて、荷物整理に取り掛かった。

YKは、登園早々グスグスしながらスタッフのところに歩み寄り「昨日、鉄棒で頭打ったの——!!」と泣きだした。ひとしきり泣いたらすっきりしたのか、その後ケロっと泣き止んだ。理由は何でもよかったのか…しっかり者のYKも、さすがに少しナイーブになっていたのかもしれない。その後、忘れ物を届けに来たお父さんが、YKに気がつき声をかける。「お泊り、だいじょうぶ?」その頃にはすっかり元気になったYK、「うん!」と歯切れよく答える。お父さんは傍らにいたMSにも「YKのことお願いね」と声をかけるが、「うん、だってお友達だもん!」と、はにかみながらも明快に返事される。バイバイしながら何度も振り返るお父さんの姿を、今度は逆に寂しそうに感じたのか、まるで父を心配するかのようによい笑顔で見送った。

みんなそろって、まずは着替えの準備。森から帰ってきてから着る服を出す。着替えの入っているボックスを広い場所まで運ぶ。そして、パッキングしてあ

る服から、自分の頭で考えて、必要なものを白いカゴに入れる。「う～ん！お・も・い～！！」と、運ぶのに苦労しているYU。スタッフや友だちに助けを求めめるかな？と、見守っていると、「手伝おっか？」と手を差し伸べたのは、IK。そのごく自然な優しい申し出に「ありがとう」とYU。そんなステキなやりとりをしていた二人は、森へ出かける際、“きのこ探検チーム”となって、さまざまなきのこを探す班となった。

【グループにわかれて】

◎イノシシ冒険チーム◎

今年は、少人数の縦割りを生かして、興味関心別にチーム編成し、2日間それぞれのテーマで活動を深めてもらうことにした。このところ毎日出没するイノシシの生態を追いたい！と立ち上がったのは、“イノシシ冒険”チーム…TK、RN、KZ、MS、YK、YHの6人。

まずピンクハウスで作戦会議。前日までに覚えた“イノシシの足型”の再確認！その情報をもとに、今日はみんなで痕跡を探し、子どもたちなりに“ホントにイノシシ？”“どこから来てる？”と検証していくことになった。「イノシシの足跡は、V字なんだよ！」と、VサインをしてみせるRN。よく覚えている。

人の足跡が描かれている模造紙を、スタッフが目の前に広げる。一枚は、両足を開いて歩いた、いわゆる普通の二足歩行の足跡。もう一枚は、綱わたりのようにして、一本の直線に乗るように歩いた足跡。単なる足型だけでなく、歩き方も大切な同定（見分ける）ポイントであることを学んだ時の資料だ。「これは、どっちから来て、どっちに抜けて行ったのかな？」とスタッフが尋ねると、「こっち！」とつま先の方を指差す6人。その紙の上を歩き出す、TK、RN、MS、YK。「やりたくない！はずかしいっ！」と言って、見ているYH。そこへ、KZが四つん這いになって模造紙の上を歩き出した。「あっ！KZイノシシだ！」と、笑いが起こる。すると、みんな続いてイノシシ歩行を真似る！か、かわいい！！（笑）TKイノシシが歩いた後をスタッフがマジックペンでたどる。「前足のVがここ！」「後ろ足のVはここ！」。出来上がったVの軌跡を見てみると、“前足”のすぐ後ろに“後ろ足”。重なるようにできている。イノシシの足跡は「V、Vって重なるんだね」と、YKが気づいた。いつの間にか、笑

いの輪の中に、ＹＨも入っていた。足跡のイメージができたところでウォーミングアップ終了、いよいよ本物の足跡を追い求めて、森へ調査に出発だ！

「わたし、これ持っていこう♪」と、虫眼鏡を手にするMS。「それいいね！」とＹＫ。「イノシシの足跡かどうか観てみるんだッ！」とMS。「わたしも持ってく〜！」と、RN。そんな女子たちのやりとりをみて、“あっ！そっか”という様子で虫眼鏡をもっていくことにした、男子たち。森へと向かう道すがら、何とか本物のイノシシを見ることができないかしら、しかも自分たちの身の安全を確保した上で、という会話が、子どもたちの間で展開する。「青空広場にダンボールを置いて、その中に隠れて見てたらいいんじゃない？のぞき穴をあけて」と提案したのはTK。「でも、見つかったらよ〜。」とKZ。「見つかったら、イノシシは逃げちゃうんじゃない？」とMS。「じゃあ、青空広場の上の方に隠れればいいじゃん！」とRN。以前、かくれんぼをして隠れた斜面のことだろう。「じゃあさ、葉っぱとかつけたら？」とＹＫ。「いいね！落ち葉とか土とか！」とKZ。「でも、森にダンボールないよ？」と冷静なＹＨ。スタッフにみんなの視線が集まる。「ピンクハウスにある？」と質問。「いくつかあったはず」と答えると、「それ使えばいいじゃん！」「いいね！」。…本当にいろいろアイデアが飛び出してくるものだと感心する。

何よりうれしかったのは、先週までただの「イノシシ」という、図鑑の中のひとつの名称だったものが、足の形やその力、歩き方や鼻息に至るまで、子どもたちの中でリアルに輪郭がイメージされ、まさに自分たちの森に存在している「生きもの」として、意識が変化してきていることだ。当初は、安全確保のために、対峙した時にどうしたらいいか、何をしてはいけないか、ということしかせいぜい理解していなかった子どもたち。遭遇した時の退避訓練など、怖がって泣きべそをかく子どももいた。野生のイノシシは、ジブリやディズニーにでてくる生易しいものではない。その意味で、「怖い」ということも幼い子どもたちにとっては大切な感覚ではあるが、私たちが伝えたいことは、そんな薄っぺらなことではない。誤解を覚悟で言うのであれば、スタッフは、ぜひともこの機会に、子どもたちを野生のイノシシに会わせてやりたいと考えていた。その荒々しい鼻息、泥まみれの体毛やにおい、急斜面も軽く駆け上る颯爽とした走り、地面を片っ端からバッコバッコと掘り返してしまう力強さを目の当たりにしたら、“甘ちゃん”や“なんちゃって”の私たちは、ホンモノの「野生」を一瞬で思い知ることになるだろう。今、その小さな気配だけで、人間のちっぽけさ、野生のすごさを実感しているのだから。前述の子どもたちの会話を耳にしたとき、たかが4、5歳の子どもたちなのだけれど、そのことが同じ人間とし

て共有できている気がして、とても嬉しかった。

そうこうしているうちに、森の入り口に着いた。「新しい足跡、あるんじゃないか」とはやる気持ちが、6人の歩みを足早にさせる。15分ほど歩いてひだまり広場で”先に出かけていた竹伐り&七夕チーム“と合流。すると「イノシシの跡、さっき見たよ！」と耳より情報！「どこ？どこ？」と尋ねると、なんと！森の入口の斜面！が一瞬(; ∇ ;)急ぐあまり見落としてきてしまったのだ。「よし！戻ろう！」とTKを先頭にきた道を駆け出す。

森の入口に戻り、周囲をじっくり見回してみると、「あった！これじゃない？」とMS。確かに斜面の一部を上から下まで踏み固めたように草が倒されていた。「ねえ！ねえ！！これ足跡じゃない！？」と草の合間の地面に目をやり、興奮気味のRN。その指し示した先には、うっすらV字の跡。「ほんとだ～！」と声をあげるTK。「上に登ってたんじゃない？」と推測。「ねっ！ねっ！これは??」とYHはその先に続く痕跡を発見したようだ。みんなで見に行く。「きっと、この草が倒されているところを通って行ったんじゃない？」とKZ。「そうだね！青空（広場）まで行ったんだね！」と、盛り上がり、ぜひその跡をたどって行きたい、という話題まで上がってきた。「面白そうだけど、ここを登って探検するのは危ないかな…」とスタッフ。「じゃあ、川の反対側に久しぶりに藪こぎに行ってみようよ！」とYH。「いいね！あっちのほうが探検しやすいよね」とみんな大賛成！急いで坂道を下って、橋を渡る。

久しぶりの川向かいのルート。イノシシの痕跡が見られるようになってから、まだ一度も入っていない。新しい痕跡が見つかるか？もしかして、イノシシに出会える？と、期待とドキドキが入り乱れる。スタート間もなく掘った跡を発見！6人で足跡がないかしゃがみこんで探す。虫眼鏡を取り出すMSとYK。奥に進むと大きな堀跡（ヌタ場）もあった。後半を歩いていたYHが「こっち来て！」とみんなを呼び止める。「なに？なに？」と行ってみると、掘った跡から木の根っこが見えていた。「食べようってしたのかな？」とKZ。「イノシシはおイモとか食べるんじゃない？」とRN。想像が膨らむ。更に先に進むと、今度はYKが何かを発見！「あれ？これもイノシシ??違う？」小さいが深い穴が空いていた。これまで観てきたイノシシの痕跡とは何かが違うことを感じているようだった。「イノシシは、バ～！！って掘っているよ！」とMS。じゃあ、これは一体誰のもの？足跡は残念ながら見当たらない。しかし、その時、森の生き物でこんなに上手に穴を掘る生き物がいることを思い出したKZが「アナグマなんじゃない？」「！！！」「青空広場の上にある巣穴と、繋がっているの

かな????」

残念ながらイノシシには会えなかったが、姿がみえない痕跡を追う活動だっただけに、持っている知識や情報をフル稼働して、考えたり想像する場面がよく見られた。予想していたよりもたくさんの痕跡に出会えた川沿いの藪こぎ。「来てよかったね!」とRNがポツリ。「みんなにも教えてあげたいね」とYK。「青空広場に新しい足跡あるかな?」とTK。見えないけれど、確実にここに何かが生きている、そんなことを体いっぱい感じながら、みんなが待つ青空広場へと向かった。

◎竹伐り&七夕チーム◎

一方その頃、「お泊り中に、のこぎりを使えるようになりたい!」という、YI、NK、YT、SY、MU、STの6人は、“竹伐り&七夕チーム”に名乗りを上げ、七夕用笹を伐りに竹林を目指していた。ピンクハウスを飾るための笹は、かなり大量に必要だった。子どもたちがのこぎりを練習するにはいい機会だったが、この時期は、暑さや虫の中、集中し続ける力も必要とされる。道具をカッコよく使いこなすには、当たり前だが練習や場数が必要だ。あこがれだけでは上達しない。今の6人にとってそのハードルは決して低くはないが、諦めてほしくない。上の子たちが歩んできた道。がんばることが力になる、少しずつ味わってほしい。

という大人の理想と裏腹に、YIとYTは、スタッフが誘うものの、「今は、やりたくない!」ときっぱりお断りに(;^ω^)。いつもの遊びに夢中になっている。「竹を伐ったことがあるのは、YIとYTだけだから、みんなに教えて欲しい」と語りかけると、そう言われると半分仕方ないが、まんざらでもないような表情をして、2人は「いいよ」と頷いた。最近、よくお手伝いをしてくれるYI。「竹チームを集めてくれる?」とお願いすると、青空広場いっぱい響く大きな声で、メンバーに声をかけて集めてくれた。YIは、みんなを引き連れて竹林に入り、いとも簡単に竹を伐り終え、伐った竹を一人で青広場までガンガン運び下ろす。なんと手際のおいことか。ちなみに、森からピンクハウスへ運び出す時にも、仲間の5倍ほどの量を軽々と運んだYI。「ぼく、ゴリラだもん♪」といいながら、坂道をぐんぐんと乗り越えていった。

他の5人は、YIのやり方をお手本に、地面から真っすぐ伸びている竹を、みんなで協力して切ることにした。スタッフが手元に注意しながらコツを伝え

る。まずは経験のあるY T。自信もあったのだろう。指名されてみんなの前にでるのも、全く躊躇はない。しかし、半分ほど伐って調子がでてきたところで交代となり、不完全燃焼。「Y Tちゃん、もうやりたくない！」とすね気味に、青空広場に戻ってしまった。

次はMUがチャレンジ。直前まで青空広場で竹を切る練習をしていて、あまりの一生懸命さに軍手に穴が開いてしまったほど。だが、地面から垂直に生えている竹を伐るのは、要領が違い、小さなMUにはとても難しい。しかも斜面に生えている竹…みんな心配そうに見守っていた。しばらくすると、「ふっ、つかれたあ」といいながら、「NKちゃん、どうぞ♪」と交代の声をかける。表情は満足げ。すでに次のNKの心配をしている。

NKは斜面に足を踏ん張り、全身に力をいれて竹に向き合う。両手を駆使し、彼女らしく工夫している。ものすごい集中をしているのだろう。全身から汗もふきだしてきた。髪を振り乱し、足を踏ん張り、表情は真剣そのもの。自分の担当分を終えると、「みんなで力合わせて切るんだよね♪」と、仲間と一緒に作業する喜びを表現した。

S Yは今、最後まで自分ひとりで何でもやり遂げたい期。お手伝いは全く必要ない。スタッフが介添えしようとする、大抵のことは「じぶんでできるから！」と、振り切るたくましさややりとげる根性がある。でも今日は、交代のタイミングを告げると「最後は、S Tちゃんだね♪」とすんなりのこぎりをS Tに手渡した。そして最後まで切り終えるS Tを待ち、自分たちの何倍（10倍ちかく？）もある竹を引きずりながら、S Tと二人だけで青空広場まで運んだ。その小さな背中たちが、今日は一段と、頼もしく見えた。

すねて一度は青空広場へ行ってしまったY Tも、時間がたって再び竹林に戻ってきた。しかし運び出しが始まると、何を思ったか、運んでいた竹を突然放り投げ、「Y Tちゃん、持ちたくない！」と一言。身軽になった彼は、足早に坂を登り、そのとき運悪く笹を大量に運んでいたY Iの後ろで、目に笹が刺さってしまった。一瞬泣いたが、スタッフが目の中を覗き込んで症状を確認していると、「痛くない」と程なく泣き止んだ。あ～…こういう時って、何をやってもうまくいかない…なんとなく足取りが重くなってしまったY T。自分が笹を放り投げたことを、少し後悔しているようにもみえる。この後、どんな風に気持ちのスイッチを切り替えるか、どのくらいの時間がかかるかをスタッフは見守っていたが、直後、Y Iが笹を落とした時を見逃さず、「持とうか？」とすばやく声をかけることができ、Y Iから「ありがとう」を言われる。その一

言で、ＹＴの表情は一変し、心軽く帰路に就くことができた。大人の薄っぺらな慰めや気遣いより、子ども同志のストレートな言葉のほうが、よっぽど力がある時がある。ＹＴは最近、自分の気持ちを感情豊かに表現できるようになってきた。心のキャッチボールが始まったのだ。ＹＴが気持ちを表現することで、いろんな言葉や感情が彼に返っていく。それを一つ一つびっくりしたり、ドッキリしたり、傷ついたり、ほっこりしながら、自分に気づき、人について学んでいる。友だちと関わりながら、今、成長真っ盛りのＹＴだ。

◎きのこ探検チーム◎

さて、いつも森のいろいろな場所できのこを発見しては教えてくれるＹＵと、写真を撮るのが好きなＩＫの２人は、じっくり、ゆっくり、きのこを探究してみることにした。「どんなことを調べようか？」と尋ねると、「色」「形」「大きさ」「場所」など、次々と答えるＩＫとＹＵ。観察して調べた後は、きのこに名前をつけようということも決まった。普段の活動では、それぞれの興味のテーマで、自己探求していることが多い２人。互いにペアを組んだのも、誰かとの共同作業も初めてだ。互いの個性を知り、互いを活かしあえたら、素晴らしい成果に結びつくに違いない。その為にも役割やお互いの気持ちをリスペクトすることも、学んでほしい。そんな想いもあり、森に行く前に、ＩＫがブロックで作ったきのこを使って、ピンクハウスで役割や作業の流れをシュミレートした。スタッフが保育室の片隅に隠したブロックきのこを、ＹＵが「あったー！」と見事に「発見」したら、ＩＫがカメラでパシャリ、という流れだ。これで準備万端！「エイ・エイ・オー！」と円陣組んで、いざ出発。

「第一号はどこで発見するかな・・・」と話しながら、畑から森への小道を歩いていると・・・「あ、木がしゃべっている・・・」とＹＵ。スタッフが「なんて言ってる??」と聞くと、「あのね、『ブルーベリー、ちょうだい』だって♥。ブルーベリーが食べたいのかな♪」と嬉しそうにスタッフに語ってくるＹＵ。一方、森へ続く道を通った時、キレイな色の虫の死骸を発見。「キレイだね～」とひとしきり眺めた後、スタッフが「後ろから来るみんなも気づいてくれるといいね」と言うと、ＩＫは合掌して「みんなが虫に気づきますように」とお祈り。２人とも、本当に素敵な感性を持っている。しばらく進むと、ＹＵが「あった！！」と、第一号きのこを発見！「よし！」とＩＫがパシャリ。２人で「色」、「形」、「大きさ」、「場所」をひとつひとつ観察しつけた名前は、形にちなんで

『ハートきのこ』！森の入り口に差し掛かると、2人で元気に森にご挨拶。「前、この辺にあったはず…」と、今までの記憶をたどったり、「僕は左側を探すから、YUは右側を探してね」と役割分担しながら森を進んだ。その後も次々と発見し、「ミニトマトみたいな大きさだから『ミニトーマ』」。「新幹線の先っぽみたいな形だから『しんかん』」。「9個あるから『きゅうちゃん』」など、2人のアイデアで名前をつけていった。IKとYUは、途中で投げ出すことなく、青空広場までの道のりで、14種類のきのこを観察した。

活動中、こんなこともあった。上着のフックにぶら下げていたIKのカメラが、坂を登る時に軽く木に当たってしまった。「カメラ大事だから、ポケットに入れておこうね」と伝えると、「いいや、大丈夫」と拒むIK。「じゃあ、＜大切に＞持っていて。今度、当たってしまったら預かるよ」と言うと、「分かった」といい、その後は注意して決して当てることはなかった。誇り高き5歳児、さすがである。互いの気持ちのやりとりを模索する場面も多々あった。「僕が先頭！」と意気揚々と進むIKに対し、「なんで、IKくんがいつも先頭なんだろう・・・」と小さな声でつぶやくYU。スタッフが「今の気持ちをIKに伝えてみたら？」と言うと、YUは「僕も先頭がいいなあ」と自分の気持ちをしっかりとIKに伝えた。すると、「じゃあ、二人で先頭になろう！」と仲良く並んできのこ探し再開！この力が、森の年長児。

【昼食～午後の森活動】

お楽しみのランチタイム♪お弁当箱のふたを開けて「ハンバーグ！？」と子どもたち。ほんとは、野菜がたくさんつまった“つくね”♪シャキシャキひんやり野菜の漬物も。なかなか野菜に手がつられない様子のIK。「きゅうりだけは、好きだよ！」とスタッフに教えてくれた。「じゃあ、食べたら聞かせて！シャキシャキって、いい音がするのよ！」とお願いしてみる。すると、しばらくしてから「聞いて！」と音を聞かせてくれたIK。「う～ん！いい音！」とスタッフがつぶやく。近くにいたYUやKZもつられて食べる。シャキシャキの大合唱？と盛り上がっていると、その様子が気になったようでSTが「聞かして！」とやって来た。STの耳元でシャキシャキシャキ！「ほんとだ～！」食べておいしい、聞いて楽しい森のランチ、みんなで励まし合って支え合って、苦手も一つ一つ、克服していく子どもたち。

食後、“イノシシ冒険チーム”は、今夜に向けて「きれいな足型を取ろう！」

と、泥んこ沼地トラップ作りをスタート。MSとYKはバケツに水を入れ、地面にかける。YHとRNは“へら”を使ってきれいに整地を進めていく。KZとTKは、土を運びこんで水たまりを埋め立てていく。水をかけたり、土を持ってきたりして見事な微調整。まるで左官作業。すばらしいトラップが出来上がった。後は、夕方と翌朝観察。こうなったら、絶対にイノシシ現れてほしい！！

“へら”を使って整地作業をしていたYHは、足元にステキな黄緑の実を発見！「見て！きれいでしょ？」「これ、みんなにあげたい！」そう言って、途中、木の実探しを開始した。彼の中で“みんなに何かしてあげたい”そんな気持ちがあったようだ。昼食時、同じテーブルの友だちとちょっとした出来事があった。「YHがみんなのこと嫌いって言ってる」とYH。事情を尋ねてみると「だって、みんな意地悪するんだもん」…さっきまで楽しくおしゃべりして笑い合っていたのだが…。詳しい経緯は分からないが、どうやらおふぎけのつもりが、YHにとっては、不本意ながら、嬉しくない方向に展開してしまったようだ。もちろん、まわりの子たちも悪気はない。でも、こういう時こそ互いの気持ちを知るきっかけとなる。“自分は楽しいことのもりでも、そうじゃない気持ちになる友だちがいることもある”と。また、YHにも友だちの思いにふれてもらった。毎朝必ず、朝のサークルタイムでYHの名前があがっていること、「次はYHくん、いつくるの？」とみんながいつも気にかけていること。楽しいことやイベントの予定を話すと「YHくんも来たらいいね！」と、みんなが話していること。YHの中で、「友だちが自分を思ってくれる気持ち」を感じ取れたのだろうか。それまで手を付けていなかった給食を食べ始め、また友だちと笑い合っって話をするようになった。そんなことがあって、きっと彼の中で“みんなにお礼をしたい”という気持ちが芽生えたように思う。そんなあったかい思いのこもった「木の実」を渡すのは、まだもう少しあとのこと…

“きのこ探検チーム”のYUとIKは、昼食後、みんなより一足お先にピンクハウスに帰り、きのこポスター作成に取りかかろうと話をしていた。しかし、竹伐り&七夕チームに感化され、のこぎりをやりたくなってしまったIK。「ぼくも、のこぎりがやりたいんだ」と頑なに主張し、のこぎりの手元を凝視し、顔すらこちらにむけてくれない。「写真もプリントアウト出来たから、ピンクハウスに帰って、写真を貼ろうよ」と誘っても、「いやだ。竹が伐りたい！」と作業の手をとめない。IKのこだわりももちろん大切にしたいが、YUとの共同作業もとてもいいところまで来ている。きっとこれをやり遂げれば、今まで彼らが経験したことのない、大きな達成感を味わえるはずだとスタッフは確信し、のこぎりに傾いたIKの気持ちを揺り戻す術を、丁寧にじっくりと探

る。

スタッフ：「みんなが帰ってくるまでに仕上げてびっくりさせようよ。のこぎり、あと何回で終わる？」

IK：「60回」

スタッフ：「それじゃ、写真貼るの、間に合わないよ！あと、3回？2回？1回？」

IK：「6回！」

スタッフ：「OK!じゃ、あと6回ね！」

その後、懸命に竹を切り、6回終わったところで「はい、終了～～！」と、スタッフに気持ちよくノコギリを渡してくれ、帰る支度に取り掛かった。活動のテーマから一瞬それたのはそのワンシーンだけ。朝から午後まで、二人は集中してきのこを追った。写真を切ったり、のりで貼ったり、絵を描いたり最後までやり遂げた。写真に収めた14種類のきのこを、みんなに伝えたい！そんな気持ちが彼らを支えていた。

色を調べる時にYUが言った色に対し、「違う！」と強い口調で切り返したIK。「YUはそう思ったんだよね。同じものを見ても、ひとりひとり感じ方が違う。どれが正しい、どれが間違いじゃないんじゃない？」というのと、「そっかー」と頷いたIK。「“違う！”って言われたらどんな気持ち？」と聞くと、「嫌だよね～」とこれも分かっているようだ。スタッフが「違う！じゃなくて、“そうかな～？”とかって言う言い方はどう？」と提案すると、「いいね！」と言い、その後うっかり「違う！」と言ってしまった時も、「あ、間違っちゃった(;^ω^)」と言い直している姿があった。IKとYUという感性豊かな2人だからこそ、感じ方は多様だと気づかされるし、互いにいい刺激になったように思う。同じきのこを見ても「茶色」、「黒」と意見が違ったり、大きさの観察では「葉っぱと同じ大きさ」、「ポテトチップスと同じ大きさ」と比較する物が違ったり……。同じものでも、人によって感じ方や考えは違うもの。多様性あふれる森の中では、こんな当たり前だけど大切なことを教えてくれるチャンスがあふれている。言葉でいうほど、他者を受け入れるということは、簡単ではない。特に幼児期の子どもたちにとっては、なおのことだ。2人は気づかぬうちに、そういう大切なこともどっぴりと体験していた。

笹隊のお手伝いで、笹を持ちながら、「笹の葉さらさら～」を2人で仲よく大合唱。森を抜け、フェンスのところで、水分補給&休憩していたら、IKが突然

「カメラ、貸してくれてありがとう！」ととびっきりの笑顔でスタッフにお礼を伝えてきた。そして、すかさずYUが「また、きのこ探し行こうね～」とニコリ。きのこ好きのYU、カメラが得意なIK。それぞれの役割を十分に果たして、充実の1日。じんわり感動した場面だった。

【おやつ、休息】

竹を運び終え安堵の竹伐り&七夕チーム。そこへ「早くシャワーしないとイノシシチームが来ちゃうよ！」とスタッフの声がかかり、あわてて服を脱ぎだす。しかし、MUはそんな時でも丁寧に一枚一枚ぬいで片づけていく。身の回りのことを日ごろからちゃんとやっている成果だろう、最近はお友だちの手伝いまでしてくれているから、びっくりだ。汗をかいたあとのシャワーは最高で、SYは顔を洗うときに直接シャワーをかけてもへっちゃら！タオルだって自分たちで取り、体をふくこともできるようになってきた。みんなとてもたかましい。

おやつはかき氷。梅雨の晴れ間の暑さに、とてもおいしく感じる。電動のかき氷機は、大きな氷をいとも簡単にサラサラにかいてくれる。シャツシャツとカップに降り積もる氷に心が躍る。TK、YI、KZ、RN、YK、YHのイノシシチームは、よく動いたこともあり、氷をおかわり。2杯目は自分でやって、と伝えると、ドキドキしながらカップを氷のカッターの下に備える。スイッチをいれると一瞬で自分の手にも冷たい氷が積もる。6人でキャッキヤと嬉しそうな声をあげた。きのこ探検チームは、2階の個室にとじこもり、ポスター作業に精を出していた。14枚の写真を張り終わり、名前を付け終わった時、丁度おやつのかき氷の差し入れが到着。「かんぱ〜い！」IKとYUは、かき氷でポスター完成をお祝いした。

今年はイチゴとメロンの2つのシロップを用意した。女はイチゴだ、男はメロンだと考えている子、そんなことおかまいなしで悠々と常識を超え両方選ぶ子など様々だ。シロップのチョイス一つとっても、個性がでる。森では、この「こだわり」をととても大切にしている。一方、あまりに頑なであるとトラブルになったり誤解されることもある。チョイスの場面だけではない。意見交換する場面でも、「自分はこう思う」ということはとても大切なことなのだが、「それが正しい唯一の答え」となってしまうと、途端に会話はぎくしゃくしてくる。「人それぞれ違う」「同じことでもいろんな見方がある」ということを、森では

様々な場面で一つ一つ丁寧に伝えている。多様であることが豊かであることを自然から学ぶ中で、それを本当に理解できる時、自分とは違う他者を尊重することにもつながるのではないだろうか。我が身をふりかえって、親と子でも、そのこだわりは違って当たり前のはずだ。そこを乗り越えている親子は、やはりしなやかでいい関係を築いていく気がする。氷のシロップぐらいで？と思ったりもするのだが、こんな小さな日常の積み重ねこそが、実は子どもたちを育てているのかもと、つくづく考えた。

【七夕★タペストリーづくり】

雨天のため、狭い駐車場に竹を渡し、絵具でタペストリーを描くことになった。テーマは七夕にちなんで「天の川」。絵の具を握らせる前に、図鑑で天の川を紹介した。不安定なので竹を落としたり、隣の子どもと手が当たったりして揉めたりするのはと想像していたのだが、誰一人そんなことをする子どもはいなかった。「見て見て！」と一番に寄ってきたのはY U。彼の描く絵はきれいな星の形をしていて、連続性があった。まるで北欧のテキスタイル画のよう。Y Iは、満面の笑みで布に向かっている。机の上、決まった紙の中という普段の窮屈観から解放され、ワクワクしているようだ。そして「絵の具が足りないよ～」と声をかけてくれた回数も一番多く、遠くのテーブルまで絵の具を取りにきて、とても楽しんでいた。完璧に作品を仕上げたいY Tは、不安定な状態で絵を描くことも楽しめ、一筆一筆丁寧に絵の具を塗り、みんなが手で塗り始めると自分でもチャレンジをし、真っ白になった手のひらを、笑顔で見せてくれた。I Kは、絵の具のことや、描いている絵の説明や、いろんなことをおしゃべりしながら絵を描いていた。目が爛々としてとても意欲的だった。いろんな素材を使い、のびのびと描いていたのはY KとN K。やみくもに描くのではなく、頭の中でどんな風になるのかを想像しながら、たまに手を止めて作品を少し離れて鑑賞し、また描く。そして、銀の絵の具を一番使っていたのも彼女たち。特にN Kは、毎回このような工作や絵を描く場面で才能を発揮する。心穏やかに落ち着かせ、まるで書に向かうような静けさと集中力。冷静な面持ちは大人も顔負けである。N Kのその姿や雰囲気は、周囲の子どもたちに様々なよい影響を与えている。すばらしい感性だといつも感動してしまう。

R NはN KやY Kの作業をみて感化された一人だ。Y Kたちが終えても、R Nは最後まで筆を離さなかった。きっと声をかけなければまだまだ描いていた

のだと思う。彼女の持ち前の想像力を駆使し、見たこともない美しい天の川をイメージしながら丁寧に描いていた。

【夕飯】

みんなが食べ終わった頃に部屋に入ると、TKが「もう食べ終わったよ！おいしかった」と声をかけてくれた。彼は年長らしく、すべての面においえ手際がよく完ペキで、皆のよい手本になっている。お泊りなどいろんなことを立て続けにこなしていかなければならない活動では、その行動は最年長者として、リーダーとしても際立っていて心強い。

残っていた子どもと一緒にカレーを食べていると、SYが「食べさせて♥」と寄ってきた。サラダもカレーもたくさん残っているが、スプーンで「あーん」とすると、パクパクおいしそうに食べる。彼女は二日間、泣いたりもせず、お母さんの話もしなかったが、ふと見せたかわいい甘えは、彼女がまだ年少さんだったことを思い出させた。

食事のあとは、きのこ探検チームの調査結果の発表である。ステージ裏（笑）でリハーサルをした後、ポスターの前に立ち、発見したきのこの名前、その名づけの理由をIKとYUで交代しながら発表。みんな静かに聞いてくれて、後半は「はい！」と挙手して質問まで出て、IKもYUもとっても誇らしげだった。「やろう！」と決めたことを、見事に最後までやり遂げた2人。本当にかっこよかった。これからも新たな探検に挑戦し続けてほしい。

【ナイトプログラム】

おじいちゃんの庭から青空広場へ向かった。夕方18時半をまわったが、まだまだ明るく怖さは感じない。無論、イノシシの気配もない。森はまだ、夕方の装いという感じではなく、虫たちも日中と同じ種類が、青空広場を席卷し「日暮は、まだだよ～」と鳴いているようにも聞こえる。運がよければ明るい中でイノシシとの遭遇を夢見たが、こんな昼間っぽければ、まだまだ彼らの活動時間ではないだろう。残念だが、今夜から明日早朝にかけて、イノシシが出没することを願って、日中イノシシチームが仕掛けたトラップを皆で確認すること

にした。

大きな板チョコが固まらずに地面に広がっている。日中、左官屋顔負けのいい仕事をした子どもたちの成果だ。MSが「上手にできてるから、夜が楽しみだね」と嬉しそうに言った。「イノシシ、怖いけど、遠くから見てみたいなあ」とYKとKZ。「イノシシ、ここ通ってほしいね」とRN。「通ってくれたら、宝物だね!」とTK。夕暮れになり、フェンスを通過して格納庫原っぱへ住宅地を向かう。奇跡的に雨が降らなかった1日目。ナイトプログラムもこのまま実施できそうだ。

道すがら、水筒が入ったビニール袋をずるずると引きずって歩くST。「袋、結んであげるよ」というと「結ばなくていい!」と拒否。「だって、ずるずるしているよ。破けちゃうよ。」と伝えても、「いいの!」と袋を持ち上げて歩き出す。しばらくは引きずらずに歩いているが、またすぐにずるずる。何度か繰り返していたが、途中、水筒の蓋が開き、中から水が漏れ出したのを見て、「わ〜」と泣き出しそうになったので、いよいよ「ずるずるしていたから、蓋が開いちゃったね、袋も破けてお茶がこぼれちゃったね。袋、結ぶね」と言うと「うん」と頷いて、やっと結ばせてくれた。STは、みんなと同じように結びたくなかったようだ。重い水筒なのに、お兄ちゃんらと同じようにずっと持って偉かった。「今夜は結んで悔しかったかもしれないけれど、結ばなくてもいい日が、いつか必ず来るからね」

原っぱに着くと、KZはTKと一緒に早々にバツタを探し始める。MSは肉球のついた生きものの足跡を発見し、チームのメンバーにシェアしている。MSのこの観察眼は、チームの考察力を高める役割を担っている。誰よりも小さい頃から森に通ってきているMS。その感性や、正確で応用力のある感覚はとても優れたものを持っている。YHは、「みんなにあげたい!」と集めた木の実を、一人ひとりに手渡す。みんなへの思いがこもったプレゼント。昼食後に集め始めてからずっと、おやつの時も、製作のときも、大事に大事に持っていた。自然とわらべうたを口ずさみ遊び始める女の子たち。♪なべなべそこぬけ♪をやった後、♪どどんばしわたれ♪で門くぐり。NKもMUもわらべうたが大好きだ。しばらく遊ぶと「♪じゃんぐわらぐわん♪やろうよ」とYK。一回しか遊んでいないのに、歌詞もよく覚えている。

そろそろ一番星の下で、シェアリング…とシートを敷いて座ると、きれいな夕焼け空!「うわ〜ッ」と感動し、さて、ろうそくを灯そうかと座る向きを変

えると、夕焼け空と反対側の空には大きな虹が二つ見えた。そのうちに雲が切れ、なんとも大きな丸い虹が出現！IKは彼らしく「電車の線路みたい！」と大喜び。「やったー！やったー！虹だ！虹だ！！」とSYとMU。「見てみて！桜島のほう」「後ろは真っ赤なゆうやけだよ！」MSが歓声をあげる。みんなの声に右往左往しながら首を動かすと、お日様が少しずつみんなにおやすみを言い、夕焼けの赤も強く濃くなっていった。きれいな夕日を見つめるYT。でも、少し寂しくなったのか「早く帰ろう」とつぶやいた。原っぱの上で、夕焼けと虹にすっぽり温かく包まれた、そんな優しい時間だった。大きな木のシルエットと風でそよぐ草。まるでサバンナのような風景。きっとここで過ごした時間は、一生みんなの宝物になるだろう。

ひとしきり、大きな虹と見事なほど美しい夕焼けを楽しんだ後、沖縄の竹富島に伝わる「うれみしゃ」という名付け祝いの歌を歌った。竹富島では、村で子どもが生まれると、村人全員が名付け祝いに駆けつけ、「素敵な名前を授かったね、ほまれたね、うれしいね」という意味の歌を歌い、子どもの誕生を祝う。沖縄では、今でも大人が子どもに歌を歌ってあげることで、その子どもの魂をふるって強くする（心の芯を強くする）「たまふい」という文化が残っている。子どもたちに、「みんなもお父さんお母さんから素敵な名前をもらったね。生まれてきてくれてありがとう、のお祝いの歌です。」と伝えて、歌いながら、ろうそくに灯りをとると、今までのざわざわが納まり、しんと静寂な時間が訪れた。夕焼け空も終わり、次第に暗くなり始めた中に、ろうそくの炎を囲んで座る子ども達。そして、一人一人の名前を歌い込み、順番にろうそくの火を吹き消してもらった。全員吹き消し終わったあと、「今日は七夕、きれいな夕焼けも、大きな虹も見ることができ、空には天の川が流れて、きっと今日はみんなの願いごと叶う。みんなでお願いごとしてみよう」と手を合わせると、みんな真剣な顔で目を閉じ、手を合わせ、「ずっとずっとみんなと一緒にいられますように」「みんなとずっと遊べますように」とそれぞれ願いをかけていた。そして、最後の灯を、願いを込めてみんなと一緒に吹き消した。

帰り道は、竹伐り&七夕チームのみ作業のため、一足先に車で帰ることになった。みんなの羨望のまなざしを感じながら、でも文句を言う子どもは誰一人おらず、KZとYUが「あとでね～」「お仕事がんばって」と送りだしてくれた。車の中では、YIとSTが「七夕チームで良かったあ♥」。YTも「さいこう！車はらくちんだねえ！」。NKは「私お仕事大好きなんだ。おうちでも本を読むお仕事してるんだ♪」などと大騒ぎ。ぎゅうぎゅうな車の中でMUとSYはキャッキヤ言いながらおしくらまんじゅう…ハイテンション♪。

作業内容は、昼間みんなが製作した七夕タペストリーのライティング。ペットボトルの中にキャンドルを並べて着火。作品に光をあてる。作業をしていると、歩きで帰ってきた別チームの声が意外にも早く聞こえ始めた。「はやくしないと～！！」焦るY IとMUの手が、せわしく動く。別チームには通りの角で少し待っててもらい、どうにかライティング完了。6人揃って「どうぞ～！」の呼び声に促され、「わーきれい」「すてきだね」とみんなが走り寄り、感嘆の声が上がった。キャンドルの光があたる作品を眺めながらりんごをかじるMS。「きれいだねえ」。その表情はなんだかうっとり。最後に、竹伐り&七夕チームの今日一日の作業をみんなに報告。「ありがとう～！」の声に、オレンジ色の光に照らされた6人の横顔は、とても達成感に満ちていた。

【就 寝】

寝る前の歯磨きで「仕上げはおかあさん～上の歯～下の歯～前歯～」の歌をうたってあげると、子どもたちが大喜び。Y Hも、S Yも大きな口をあけてくれたが、歌が聞きたくてスタッフに仕上げ磨きをお願いしていたような感も。森の子どもたちは、就寝にさほど手がかかった記憶がない。小さくても、初めてでも、やはり疲れには勝てないということと、アットホームな雰囲気心が心と体を落ち着かせるのだと思う。今年の夏も例外ではなかった。

Y TとS Tは、真っ先に眠りについた。S Yは、T Kといちゃいちゃしている。自分の本当のお兄ちゃんたちが今夜は一緒ではない分、T Kとの時間を楽しんでいるよう（笑）。K Zは、おもちゃ置き場に頭を置き、いつものようにおちゃらけている。お泊り前は少しナーバス気味だったが、すっかり吹っ切れたようだ。とても楽しそうに一日過ごしたが、それでもまだ遊ぶつもり満々と見える。Y Uは初めてのお泊りで緊張しているのか、なかなか寝る場所を決められなかったが、冷たいお茶を一服のんで落ち着きを取り戻した。R Nは、まだまだ遊べるとった雰囲気を漂わせながら、どうにか横になっていた。ふと我に返って「別に、人形とかタオルとか、一緒に寝なくていいんだよね？」とスタッフに尋ねてきた。スタッフは「もちろん、別に一緒に寝なくていいです」と伝えると、「だよね～♪」と持ってたぬいぐるみをすみっこへ放り投げた（笑）。I Kは、スタッフとおしゃべりがしたくてたまらないらしい。「しーっ」と言われても我慢できず、ニコニコ顔。

9時半頃、ほとんどの子どもたちが寝静まっている中で、NKが「おかあさ～ん」としくしく泣き出した。スタッフが添い寝をしてトントンしても治まらない。起き上がって横抱きしようとする、きっぱりした声で「ちがう！」と言って向かい合わせの抱っこをせがむ。しばらくギューすると落ち着いたのか、寝息を立て始めた。子どもが少し大きくなり、こんなことをすることもなくなったが、NKとのひとは、もう戻ることのできない子どもとの密着した幸せな時代を思い出させてくれた。

平成 28 年 7 月 8 日（金） 2 日目

【起 床】

朝 6 時半。モゾモゾと動き出す YK。「いつも早起きなんだよ！」と話していただけのことはあり、一番最初の目覚め。トイレに行きお茶を飲む。そうこうしているうちに、また一人、二人と起き始める。7 時前にはほとんどの子どもが目覚めた。「7 時半までは静かにね」という声掛けに、早く活動したくてたまらずむずむずしている TK と KZ。途中 YH が、お友だちと少し揉め「えーん、えーん」と演技がかった声で泣いたのを理由にして、MS がスタッフの所に言いに来た。みんな退屈をもてあまし、どうにか寝室から抜け出そうと頑張っているようで面白い（笑）。そのうち、YI が「男の子集まって～」というと、NK も「女の子集まって！」と声掛け。車座になって何かお話している。そつとのぞいてみると、「ごはんは 7 時半だって…」など情報交換。全員が起きているのだが、電気が消え、雨戸が閉まった真っ暗な中、だれも怖がりもせず話をしたりゴロゴロしたり、コソコソと楽しそう♪。親戚が集まった夏休みのような雰囲気である。「朝ごはんできるまで、もう少しまっていて。」「寝ている子もいるから、静かにゴロンってして」とスタッフ。しかし、そんなことできるはずもない。お泊りできた喜びと、大好きな友だちと迎えた朝。嬉しいに決まっている。「スタッフはもう出ていったよ！」と仲間にコソコソ伝える KZ。まるで教室から先生が出て行った後の小学生のように「りょうかい！」「いえ～い！」と早速盛り上がっている模様（笑）。スタッフが「残念！まだいますから～！」とふすまを開いた瞬間、その場にバタリと寝たふりをする子どもたち。かわいすぎ（笑）

そんなこんなで 7 時過ぎ。さあ、起きよう！タオルケットをたたみ、ぬいぐるみや枕も所定の場所へ。シーツを外す。大きな白いシーツを使って「又ハハ

ハ～！お化けだぞ～！」とスタッフがふざける。「きゃ～！」と大喜び。今度は子どもたちが入ってお化けごっこ。S Y、M U、S Tの3人も、朝から歓声をあげておおはしゃぎ。一通り遊んだらシーツもお片付け。そして一番の難関、敷布団たたみ。「できるよ！」とY T。上手に二つ折り！だが、残念なことに二つ折りではケースに入らない。三つ折りにしなくてははいけなかった。布団の端を持ち、自分の頭よりも高く持ち上げる。そして、スタッフが一段目を折り込むと、そのまま蛇腹にするように降ろしていく…、できた！布団たたみも完了し、さあ！お楽しみの朝ごはん！！

【朝ごはん】

朝ごはんは、子どもたちの大好きなコアラパンとお星さまパン、ソーセージ。温かい玉ねぎと人参の溶き卵スープは、ほんのリコンソメとバターの風味。バナナの輪切り、プレーンヨーグルトには、甘みを加えるためのテンション上げるチョコレートスプレーを少しだけ。普段、早めの朝食をとっている子どもたちにとっては、寝具の片づけ後では遅かったようで、「早くご飯～」のリクエストが多く聞かれた。外は雨ザーザー。その音を掻き消すかのように、朝からにぎやかなピンクハンスの保育室。ワンプレーットの朝食を運び込むと、M Sが「わ～♥コアラパンだあ」と嬉しそう。N KはS Yと「コアラパン♪コアラパン♪」と小躍り。子どもたちの食欲は朝から旺盛で、モリモリ食べている。Y Iも抜群の安定感でスープを3杯飲み干す。S Tに至っては、コアラを何匹食べただろう（笑）？M Uは、「コアラちゃんのお顔、食べちゃった♥」とケラケラ笑っている。Y Tにもその声がきこえたようで、「Y Tちゃんは、足から食べたよ～」と会話している。普段ゆっくり派のY UとK Zも完食。S Yもメニューがお気に召したようで、別人のように全種類をおかわりした。

【七夕かざり 総仕上げ】

昨日、絵の具で布にお絵かきして作った“天の川”。それと一緒に笹飾りも飾ることに。子どもたちお得意の折り紙の“輪っか作り”。「長い作るぞ～！」と意気込む子どもたち。なぜだかテーブル対抗の長さ競争になった。「こっち、もうこんなに長いもんね～！」と、隣の班にプレッシャー？をかけようとT KとK Z、Y H。でも、ちっとも動じない、M S、Y K、Y T、Y I。それぞれに作ったものを合体していく。敷居を挟んだテーブルでは、そんな戦いなど気に

せず、もくもくと作りこむMU、SY、YU。輪っかを作ってつなげていく作業がまだちょっぴり難しかった様子のST。紙をまっすぐ縦長にしてのり付けし、つなげていく。手っ取り早く輪っかバージョンよりも長くなった。しかし、のりが乾ききらないうちに移動させるものだから、何度も「あっ！ちぎれた！」となり、修繕作業。そんなこんなでとてつもなく長くなった輪っか飾り。笹につけても地面について引きずってしまうほど！ツリーのように笹にぐるぐる巻き付けて、“七夕のお飾り”が完成した！

【そうめん流し屋、開店！】

まもなく昼だというのに、雨の勢いが収まらない。むしろ、ますます強くなる一方だ。例年にない強い雨がピンクハウスに打ち付けてくる。軒下でやろうと設置しておいたそうめん流し用の長い竹には、激しく雨が打ち付けて、まるでピンクハウスの玄関前で雨どいのようにも見えてくる。時間は迫っている。そうめん流しをあきらめて器で食べるか、雨がやむのを待つか…ギリギリの判断。

しかし、子どもたちは不安を感じることなく、雨音を楽しんでいる。この子どもたちは、本当にすごい。いつも直接、<肌>で雨を感じている彼らにとっては、どんなに強い雨であろうと、屋根や壁があるだけで、なんてことはないものになる。自然の中で直接あびる雨や風は、心地よい時ばかりではない。大人ですら、恐怖を感じる時がある。昨年度退園した園児が、先日久しぶりに森に遊びに来たとき、あれほど遊びなれた竹林に、久しぶりに入るのが怖いといって入森を躊躇していたことを思い出した。今日の生活環境では、当たり前かもしれない。現代人の感覚など、甘やかせばみるみる鈍くなり、いとも簡単に以前の状態に引き戻されてしまうのだろう。森に毎日通っている子どもたちの感覚は、ある意味本能的で、もしかすると動物や植物により近い状態なのかもしれない。だからこそ、小さい時の毎日の積み重ねが、力になるのだなあと、こんな雨降りになるたびに感じている。

そんな彼らが相手だから、豪雨などやめる理由にならない。屋根や壁があるんだもの、「全然いけるでしょう？」「予定どおり、そうめん流しでしょう？」と、キラキラした瞳で見上げる子どもたち。大人のこちらが試されている感さえある。こうなったら、もちろん、うけてたちましよう！！

「やるよ！！そうめん流し！！みんな協力して！！」

「待ってました！」と言わんばかりに、机やいすが並ぶ。力自慢のY Iが、指名をうけ、すべての道具を運んでくれる。重いテーブルや針金など、仲間たちの間をぬって慎重に運ぶ様子を、全員がかたずを呑んで見守る。指示も的確に理解してくれ、本当に頼りになる存在になってきた。

スタッフはそれらを受け取り、テラスの手すりや下駄箱に竹の流し台を固定する。問題は竹の流し台の長さ。そこは5年以上の経験が生きる。Kさんが前日に切り倒し、割ってふし抜きしたばかりの孟宗竹は、明るいクリーム色でシミ一つない。長さは4m。これがピンクハウスのテラスの端から端まで届くかどうか…。置いてみると、竹は絶妙で理想的な長さだった。まるでYちゃんが、今日のために設計してくれていたのではと思うぐらい、テラスには全員分の机やいすがピタッと納まり、流し台もすばらしくぴったりの長さで設置できた。Y Kが「こんなお店、ありそうだよな（笑）」と嬉しそうに言うと、「ありそうだよな」とN Kが笑う。「お店みたい！お店みたい！」とS YとM Uはニコニコ2人でまたまた小躍り。「早く食べたい〜！」と朝ごはんが終わったあとから楽しみにしているR N。「そうめん流れてこないよ〜」とK Z。「早く流して〜」と声をあわせて大合唱のY HとT K。

まずは試しに、葉っぱを流すことにして、Y Uを指名した。彼はこの類のそうめん流しが初めてらしく、これから一体何が起きるのか、頭をフル回転させながら言われるままに庭の葉っぱをちぎってきた。スタッフが水道の蛇口をひねると、勢いよく水がホースから出てきて、流し台の上流から一斉に水が下流へ向かって流れていく。全員が両サイドに立ち、流れをチェックして「オッケー！」「OK♪」「OKィ」「オーケー！」と順番に声があがり、一番下流のS Tの「おっけ〜♥」の声が聞こえた。子どもたちからは自然と拍手が沸き起こる。いよいよY Uに葉っぱを流してもらおう。子どもたち全員の瞳がキラキラしている。水にのって流れていく葉を追って、また「オッケー！」「OK♪」「OKィ」「オーケー！」と、最後に「おっけ〜♥」が聞こえ、「おお〜！！」の雄たけびと大きな拍手が豪雨の音すら掻き消した。

28の瞳がそうめんの入ったボールを持つスタッフの指に集中している。怖いぐらいに（笑）。試しにボールを頭の上へ持ち上げてみた。28の瞳が上を向く。おへその下まで下げてみた。もちろん視線はスタッフのへそへ向く。靴箱の後ろに隠してみた。「おいおい、いい加減にしておくれよ〜」的なため息が聞こえる。時は来た！そうめん、味付けうずら卵、キャラクターかまぼこ、サクランボ、でっかいミニトマト、キュウリのスライス。例年と違い、狭い会場で着席

スタイルのため、途中で場所を変わることができないから、あらかじめ利き手や背の高さを配慮して席順を決めた。だれもが上手にそうめんにありつけている。KZはミニトマトばかりをカップにため込み、肝心のそうめんが入らない（笑）、でも、何だかとっても嬉しそう。YUは、「こんなの初めて〜♥」と大興奮。見たことないぐらい食べることに集中している。YHは「たまごばっかりだよ〜」とクレームを言ってきたので、YH以外に全員手を出さないようお願いし、「YHに愛をこめて🍷」とキャラクターかまぼこを流した。その様子をうらやましそうに大きな瞳で見つめるYT。「わかったよ、YT。YTに愛をこめて」と、YTにもキャラクターかまぼこを流すと、決して取り逃すまいと、指を水の中に突っ込み、必死でかまぼこを押さえていた（笑）。YHの時もYTの時も、みながちゃんと状況を受け入れ、仲間の様子を見守り、待つことができる。以前、わらべ歌遊びをした際も、ちゃんと自分の番を待つことができ、友だちに譲ることができたが、ここでも彼らの心の成長が垣間見えた。

【変わらぬ降園風景…でも】

あっけなく、でも有意義に、今年もあっという間に2日間がすぎた。一方、いつもの降園のようなそぶりの子どもたち。大人が夢見る「感動的な再会」的な（笑）…とはいかないようだ。男の子たちはなんだかたくまし気な表情で、女の子たちもにこやかな中に凜々しく、皆歯切れのよい「ただいまー！」の一言を発してピンクハウスをでて親元へ走る。社用車ですでに荷物は各家庭の車へ運び込まれていて、子どもたちはいつものリュック一つだったからかもしれない。小さく色とりどりのかわいい長靴たちが、大粒の雨の中、軽やかに水しぶきをあげながら、大きなお母さんの傘下に飛び込んでいく。ママ達もほっとした表情。楽し気に、駐車場に展示されていた天の川タペストリー作品をどの子も自慢げにママに見せている。

そんな中、一人だけ大粒の涙をうるうる目にためているのは、YT。「YTくんは…YTくんは…自分で持てるから、（一段と音量をあげて）YTくんの荷物は、持っていくなーっ！！（泣・怒）」と、雨音を掻き消すほどのシャウト！スタッフも了解していたのに、他の荷物と混じって、すでにピンクハウスを後にしていたYTの荷物。ごめんよ〜YT（;^ω^）。2日間楽しく乗り切ったカッコいいお兄ちゃんの表情を、お父さんに見てもらおうつもりだったのに…！！悔やまれるスタッフ。日ごろ、自分のものは自分で持つ、ということを徹底しているだけに、YTの想いはその通り。入園のころは一言も発せず、こんなに自

分の意思を強くもっているとは想像できない姿だったが、今年度に入り、すばらしい成長ぶり。先日、もう一人妹が生まれ、名実ともに更にお兄ちゃんに…ますますこれからが楽しみ。大雨どしゃぶりのお泊りの降園は、いつもと変わらぬ風景にもみえたが、でも確実に一回り、二回り大きくなった14人の子どもたちだった。